

山と海と科学

左右田 健次*

論語の中に「知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ。知者は動き、仁者は静かなり。知者は楽しみ、仁者はいのち長し」という条があります。水と山、知者と仁者をいずれが貴しと比較するのではなく、山と水になぞらえて人間の楽しみを詩的に述べたもののようです。しかし、古来動的な水と静的な山とはいつも対置されてきました。さて、私は三河の海に近い田舎に生れ、子供の頃から海で遊んでいたのに、あるいはそれだから中学に入ると却って山登りに熱中し、戦争で休部になっていた登山部を友人達と再建し、大学でも山岳部に入りました。田舎から笈を負うて京都大学に学んだ一因はこの大学の山岳部への関心にあったとも思います。

「人は何故山へ登るのか」と問われるといつも困ります。1924年、エヴェレスト（私はチョモランマというチベット名の方が好きですが）の頂上に向かったまま消息を絶ったJ. マロリーが言ったように「山がそこにあるから」としか言いようがないのかも知れません。古代、人類は自然の中に生活し、「自然の子」として存在していたので、さぞかし高い山に登り、海に遊んだであろうと想像されます。しかし、実際にはその逆であったようです。大自然の力の前にほとんど無力であった人々は自らの生存や生活を守るのに精一杯で、山麓で狩をし、海辺で魚を取っても生活圏の外にある高い山々や外洋への関心を持つゆとりなどなかったのです。

ヨーロッパにおいて神が社会や人間を強く規制した中世が過ぎ、13世紀末、ルネサンスや市民革命が起って、人間の精神や思想が古い制度や宗教の絆から解放されると山も海も人間の強い関心の的になっただけでなく、営利とは無関係に高い山々へ登り、外洋へ漕ぎ出すことに喜びを持つようになったのです。明の鄭和によるインド洋などへの大航海（15世紀）が行なわれ、ヨーロッパは15～17世紀の大航海時代に入り、欧州アルプスが登られ始めました。未知の世界への探求が始まったのです。近代科学も正にこの時代に誕生しました。コペルニクス、ガリレオ・ガリレーそして17世紀レーフェンフックによる顕微鏡の発見、18世紀のニュートン、リンネ、ラヴォアジエ・・・と名前を挙げるだけで十分でありましょう。山登りも航海も科学も根は一つと言えます。人間という動物の面白さの一つは未知を追い求める本能にあると思います。

生物の誕生から30数億年、生物進化の頂点に立って比類のない繁栄を享受してきた人類は自らの生んだ科学技術の陰の部分、環境問題、資源・エネルギー問題などの山積する苦渋の世界に入ろうとしています。人類はかつて未知の海や未踏の山に向かった頃の初心に立ち返ってこれらの難問を解決しなければなりません。ギリシャ哲学、キリスト教に源を持つ近代科学に解析、細分化より思索と総合化を重んじる東洋の考えを加える必要もあるでしょう。21世紀を目前にして日本の科学者の責務は山より重く海より深いと言えます。

*海洋化学研究所所長